

生涯発達の視点から見るコミュニケーション能力 —「生活のための日本語」探求のために—

国立国語研究所 日本語教育基盤情報センター
金田 智子・福永 由佳・黒瀬 桂子・武田 聡子

キーワード：コミュニケーション能力、定住型外国人、生活のための日本語、生涯発達、言語教育政策

1. はじめに

日本に暮らす外国人の滞在の長期化・定住化・家族化が進んでいる現在、在住外国人を一時的な滞在者としてではなく、日本社会の一員、つまり、日本社会を創る人として捉える必要がある。これは、留学・研究、就労というように、滞在の目的のみを視点にして外国人を見るのではなく、家族としての役割、地域社会で生活を営む者としての役割など、多様な側面を持つ人として見直すことでもある。そして、日本語学習者のその時々々のニーズに応じた、目的別の日本語教育を考えるだけでなく、留学から就労、就労から家族形成、子育ての時期から子どもの独立、老後、というように、「人生」や「成長・発達」を視野に入れた教育を検討していくことが重要となる。「生涯を日本で過ごす人」という視点で外国人を見つめ、日本語教育の内容や方法を検討することが求められるのである。そのためには、従来の教育内容を、社会参加や生涯発達の観点から見直すと同時に、社会で生きていくための能力とは何か、その中で、コミュニケーション能力あるいは日本語能力はどういった位置を占めるのかをあらためて検討する必要があると考える。

以上の問題意識から、国立国語研究所日本語教育基盤情報センターは、2006年より、調査研究「日本語教育における学習項目一覧と段階的目標基準の開発」に取り組んでいる。国内外の移民等向けの自国語教育に関する先行事例を参考にしつつ、具体的な調査データをもとに学習項目一覧と段階的目標基準を開発することにより、日本語学習内容の選定・カリキュラム作成、教材や試験の作成における基盤的な資料を提供しようとするプロジェクトである。日本での生活が長期あるいは生涯にわたる外国人を「定住型外国人」と呼び、特に、日本での自立した生活を求める外国人にとって必要な日本語とは何かを明らかにすることを目的としている。そのための方法の一つとして、日本国内ですでに開発されている、中国帰国者向け日本語教育の内容、オランダやアメリカにおける移民等向け教育の内容等入手し、定住型外国人が身につけるべき能力の枠組みと要素を比較対照した。本発表では、その結果を踏まえ、これまでの言語教育で研究されてきたコミュニケーション能力の枠組み、現代社会に生きる人間に求められる能力を参照しつつ、定住型外国人が身につけるべき「生活のための日本語」を検討する。

2. 「コミュニケーション能力」はどう捉えられてきたか

尾崎(2006)は、「コミュニケーション能力」を、「言語という記号体系、言語使用に関する社会的な約束事および言語外の知識をもとに、相手に伝えたい表現意図、相手が伝えたいと思っている表現意図を①正確、②迅速、③適切に表出する(話す、書く)能力、理解する(聞く、読む)能力」と定義している。この能力の枠組みについて、代表的なものについて触れておく。

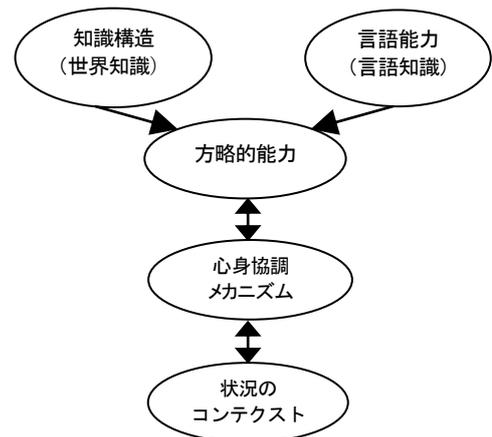
2.1. カナールとスウェイン

第二言語教育あるいは第二言語習得の研究においては、カナールとスウェイン (Canale & Swain 1980, Canale 1983) が提唱した枠組みが代表的である。コミュニケーション能力 (communicative competence) を構成するものとして、文法能力 (grammatical competence)、社会言語能力 (sociolinguistic competence)、方略能力 (strategic competence)、談話構成能力 (discourse competence)、がある。

2.2. バックマン

バックマン (Backman 1990) は「言語コミュニケーション力」¹ (communicative language ability) という言葉を用い、それを図1に示したような要素と相互関係で捉えた。言語コミュニケーション力を大きく「知識・能力 (knowledge, competence)」とそれを用いる「対応力 (capacity)」の二つの要素からなると考えた点においては、それまでのコミュニケーション能力の考え方と変わらないが、バックマンが対応力として捉える「方略的能力 (strategic competence)」は、カナールとスウェインらが示す「方略能力」よりも意味が広く、言語コミュニケーション力の中核をなしている。「言語能力 (language competence) / 言語知識 (knowledge of the language)」と「知識構造 (knowledge structures) / 世界知識 (knowledge of the world)」は方略的能力によって駆使されるのである。そして、「言語能力 / 言語知識」は、組織的能力 (organizational competence) と語用論的能力 (pragmatic competence) とで構成され、前者には文法的能力 (grammatical competence) とテキスト的能力 (textual competence)、後者には発語内的能力 (illocutionary competence) と社会言語学的能力 (sociolinguistic competence) が含まれている。

バックマンの「言語コミュニケーション力」の特徴の一つは、知識として、言葉そのものに関するものだけでなく、世界知識、つまり、言葉を理解したり構成したりするために必要な、トピックの内容に関する知識が含まれている点である。



[図1 言語コミュニケーション力
(Backman, 1990)]

3. 移民等を対象とする自国語教育の内容²

移民等の受け入れの歴史の長いオランダとアメリカにおける自国語教育の内容と、国内における中国帰国者向け教育の内容について比較対照を行った。アメリカに関しては、成人教育の専門団体であるCASAS (Comprehensive Adult Student Assessment System) が作成した、成人を対象としたESL教育の内容に関するスタンダードを、オランダに関しては、市民統合テスト (Inburgerings Examen) 出題のためのシラバス「統合の最終達成目標」である「オランダ語の達成目標 (Eindtermen Nederlandse Taal)」と「オランダ社会に関する知識の達成目標 (Eindtermen Kennis van de Nederlandse Samenleving)」を、中国帰国者向け教育に関しては、中国帰国者定着促進センターが開発した「目標構造表」を対象とした。

これらの教育内容に共通しているのは、「言語」を中心とした領域と「社会生活を営む

ための知識・能力」を中心とした領域とが互いに切り離せないものとして存在するという点である。たとえば、オランダの場合、オランダ語とオランダ社会に関する知識は別々に試験され、それぞれのシラバスが存在している。しかし、たとえばオランダ語の達成目標の具体例を見ると、「予約を入れるために、歯医者電話番号を調べることができる。」というように、歯医者の予約を電話で済ませることができるということ、電話番号を調べる方法など、オランダ社会に関する知識を持っているからこそ、オランダ語を用いて達成できるような言語行動が目標となっている。また、オランダ社会に関する知識も、オランダ語による試験であり、一定のオランダ語能力が求められている。

そして、ここに挙げた3種のシラバスはいずれも、達成目標を「～できる」「～する」といった具体的な言語行動によって表現している。コミュニケーション能力は、何らかの行動によって表現され確認される、という考え方が根底にあることが伺える。

複数の共通点がある一方で、「情報を選ぶ力」や「リソースを用いる力」「計算する力」など、いわゆる「学ぶ力」に関わる能力を教育内容に反映させているか、反映させる場合に、どのように組み込んでいるのかについては、国やシラバスによる異なりが見られる。たとえば、それぞれのシラバスが扱う領域・分野は以下の通りである。（波線部分は「学ぶ力」に関わるもの。）

<CASAS コンピテンシー³の9領域>

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 0. 基礎的なコミュニケーション | 1. 消費者のための経済学 |
| 2. <u>地域のリソース</u> | 3. 健康 |
| 4. 雇用 | 5. 政府と法 |
| 6. <u>計算</u> | 7. <u>学ぶことを学ぶ</u> |
| 8. 自立生活のスキル | |

<オランダ語の達成目標 場面>

1. 市民生活（市役所等、支払い、保険、住居、教育、隣人関係）
2. 子育て（乳幼児健診センター、プレイルーム、小学校へ、小学校との連絡、他7場面）
3. 就労（一般：職探し、職場で）
4. 就労（職種別：省略）

<オランダ社会に関する知識の達成目標 テーマ>

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 仕事と収入 | 2. マナー・価値観や規範 |
| 3. 住まい | 4. 健康と保険医療 |
| 5. 歴史と地理 | 6. 各種機関 |
| 7. 国家組織と法治国家 | 8. 教育と育児 |

*他に、「一般的な能力」として、「情報源を選択する」「情報源を利用する」「正式あるいは略式の援助が得られる機会を活用する」「適時かつ時間内に対応する」も必要とされる。

<中国帰国者定着促進センター「目標構造表」 小目標>

1. 交通、消費生活、センター、住居・近隣対応、職場・自分学校、健康、通信、社会福祉・手続き、子弟教育、生活技能

2. 一般教養、異文化、日語自学
3. 話題コミュニケーション、日語知識

ここに示した異なりは、ごく一例に過ぎないが、こういった相違の背景には、シラバスの目的、教育プログラムの期間、学校体系、外国人受け入れ政策、コミュニケーション能力観、生涯発達に対する視点等があると考えられる。定住型外国人が身につけるべき「生活のための日本語」を検討する際には、その背景を十分に理解した上で、これらの先行事例における共通点と相違点を参考にする必要があることは言うまでもない。

4. おわりに：現代社会を生きる上で必要とされる能力をどう捉えるか

経済協力開発機構（OECD）は、複雑化していく現代社会を生きる成人にとって必要な能力（キー・コンピテンシー）を、「相互作用的に道具（情報テクノロジーのような物理的なものと、言語のような文化的なもの両方を含む）を用いる」「異質な集団で交流する」「自律的に活動する」の枠組みでとらえている（ライチェン&サルガニク 2006）。現代社会で人生を全うするには、どの国で生活しようとも、外国人という立場であったとしても、これらの能力を持つ必要があるということである。こういった能力を「生活のための日本語」にどう関連付けていくのかは、今後実施する目標言語使用実態調査やニーズ調査の結果も踏まえ、検討していきたい。

尚、発表当日は、3種のシラバスの共通点と相違点をより具体的に紹介し、コミュニケーション能力の構成要素との関係、生涯発達との関連について論ずる。

【注】

1. バックマンの用語の和訳は、柳瀬（2006）を用いた。尚、カナルとスウェインの用語の和訳については複数の文献を参考にしている。
2. 詳細は、日本語教育基盤情報センター学習項目グループ編（2008）を参照されたい。
3. 「コンピテンシー（competency）」とは、ここでは、成人が家族、地域社会、職場で必要とするスキルを指している。日本語教育基盤情報センター学習項目グループ編（2008）を参照のこと。

【参考文献】（一部）

- 尾崎明人（2006）「第4章 コミュニケーション能力 コミュニケーション能力の育成」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』アルク。
- 日本語教育基盤情報センター学習項目グループ編（2008）『国立国語研究所内部報告書平成19年度成果普及セミナー「生活者にとって必要な『ことば』を考える』』（http://www.kokken.go.jp/katsudo/seika/nihongo_syllabus/seika/）
- 柳瀬陽介（2006）『第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察—英語教育内容への指針—』溪水社。
- ライチェン&サルガニク（2006）『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして—』明石書店。
- Bachman, L. F. (1990) *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.